パスカルの≪アポロジー≫のプラン復元に関して（XIII）

竹　下　春　日

今回まで（IX～XII）において，われわれはパスカルの《アポロジー》を構成すべき各章の順序を，推定した。今回は，残余の諸章の順序――『第一写本』の順序における前半の部分――を検討し，かつ推論決定することにし度い。

I　La. 48-Br. 62 と 1° について

（一）La. 48-Br. 62 は，《第1部の序言》Préface de la première partie なる小見出しを持つ断章であるが，この断章中には次の叙述が存する――《シヤロン区分について。これはわれわれをうっとうしくさせ，退屈させる》。これは叙述の主旨から言って，Non classé の La. 47-Br. 61（《順序》Ordre なる見出しを有する）における《私は順序というものがどういうものであるか，そしてそれを理解している人がいかに少ないかということを，いささか心得ている。人間的な学問は一つとしてそれを守ることができない。聖トマスはそれを守らなかった。》と，関連している。なぜならパスカルの言わんとするところは，シヤロンもトマス・アクイナスもともに煩瑣な所謂 <scolastique> な叙述方法を墨守するにすぎない点を，指摘することにあるからである。パスカルの眼から見るとき，彼らの叙述の順序なるものは《ordre》の名に価しないのである。ところで La. 47 は Non classé に属するものであるが，《順序》という見出しを持つ以上，当然 Classé の 1°《順序》Ordre の章に所属すると，言いうる。そしてその内容は，La. 48 の上掲引用部分を敷衍したものにすぎない。

（二）次にわれわれは，La. 44-Br. 373（Non classé）の存在を指摘しうる——《懐疑論。私はここに私の考えを無秩序に，しかもおそらく無計画な混乱ではないように，書き記そうと思う。それが真の秩序であって，その無秩序さそのものによって私の目的を常に特徴づけてくれるだろう。もし私が私の主題を秩序立って取り扱ったとしたら，それに名誉を与えすぎることになろう。なぜなら，私が示そうとしているのはその主題には秩序がありえないということなのだから。》この断章内容の少くとも一部の具体的叙述を，われわれはまさに前出の断章 La. 47-Br. 61 に見出すのである——《順序。私はこの論述を次のような順序で始めることも，あるいはできたであろう。すなわち，あらゆる境遇のむなしさを示すために，普通の生活のむなしさ，ついで懐疑論およびストマ派の哲学的生活のむなしさを示すのである。しかし，この順序は守られないであろう。私は順序というものがどういうものであるか，そしてそれを理解している人がいかに少ないかということを，いささか心得ている。》（以下既出）両断章を比較するとき，両者はともに《ordre》（順序，秩序）について重点的に触れ，La. 44 の前半と La. 47 とは，表現こそ異るが，《真の秩序》le véritable ordre ないし《順序というもの》ce que c'est〔ce＝l'ordre〕を，パスカル自身《懐疑論》pyrrhonisme にかんする論述において示さんとするものであることを，われわれは十分看取しうるのである。したがって両断章（La. 44, La. 47）は，内容的連関を持ち，しかも（一）において述べたごとく，La. 47 は La. 48-Br. 62 の詳細化であるから，La. 44 も La. 48 の少くとも部分的詳細化としての具体化であると言うことができる。それゆえ La. 48（第1部の序言）に La. 44, La. 47（これらは 1°《順序》の章にぞくする）が続くことが，知られる。すなわち《第1部の序言》(La. 48)——→1°《順序》Ordre.

（三）次に《順序》の章（1°）が，他のすべての《章》chapitres に先行する理由を述べてみたい。Non classé の La. 45-Br. 21 は《Ordre》の小見出しを持つものであるが，それは次のごとく記されている——《自然は，あらゆる真理を，おのおのそれ自身のなかに置いた。それらすべてを，われわれの技巧が，一方を他方のうちへ閉じこめる。しかしそれは不自然である。おのおの真理は自分の場所を占めている。》この断章の主旨は，自然の《ordre》を尊重す

べきだということにあり，そしてこの《ordre》なるものは，《なぜ私は，私の道徳を六つというよりはむしろ四つに分けてかかろうとするのか。なぜ私は，徳をむしろ四つに，二つに，一つに定めようとするのか。》(La. 46-Br. 20) というごとき分類の ordre にも通じ，また既出のごとき叙述の ordre (La. 44, 47) にも通ずるのである。したがって自然の《ordre》は，普遍的のものであり，かつ基本的であって，《アポロジー》にかんするパスカルの構想の基本的姿勢を示すものである。次に Classé の《順序》の章中における La. 29-Br. 60は，《アポロジー》のプランを叙しており，直前と同様構想の基本的態度を示している——《第一部。神なき人間の惨めさ。第二部。神とともにある人間の至福。》かように 1°《順序》の章は，《アポロジー》全体のプランおよび構想に対する基本を含む以上，他のすべての章に先行することは，明らかである。それゆえ（二）により，われわれは《第一部の序言》——→1°《順序》——→（他章全体）を推定しうることになる。

II　2°・8°・3° について

（一）4°《退屈と人間の本質》の章は，3個の断章を含み，このうち La. 157-Br. 152 は《高慢》Orgueil なる小見出しを持つ。他の2個のうち，La. 158-Br. 126 は《人間の描写。従属，独立の願い，窮乏。》という短断章であるが，この叙述中の《従属》dépendance は，La. 160-Br. 131 中の《Il [l'homme] sent alors son néant, son abandon, son insuffisance, sa *dépendance*, son impuissance, son vide.》から見て，人間の無力，空虚性と意義上大同小異であることが，分る。したがって，人間は無力で依存的，従属的であるにもかかわらず，彼が《独立の願い》désir d'indépendance を抱くのは，——パスカルから観て——神に依存しようとしない点で——《高慢》以外の何物でもないというのが，この断章（La. 158）の主旨である。次に残りの断章 La. 159-Br. 128 は，人間の《惨め》misérable であることを説くものである——《執着していた営みから離れることから起こる困ったこと。……五日か六日楽しく遊ぶとする。こうなると，はじめの営みにもどっても，惨めなものである。これ以上ありふれたことはない。》

以上によって，4°章は人間の《高慢》と《惨めさ》という二つの本質を説くものであることが，分る。そしてこの人間の本性の《二重性》duplicité にかんする綜合的叙述を，われわれは Non classé の La. 161-Br. 417 に見るのである——《人間のこの二重性はあまりにも明白なので，われわれには二つの魂があると考えた人たちがあるほどである。彼らには，度はずれた思い上がりから恐ろしい落胆にまで至る，こんなに，そして急激な変化が，単一の主体に起こりうるとは思えなかったのである。》つまるところ，4° 章は人間の《二重性》にかんするものであると，言いうる。

ところで 3°《惨めさ》Misère の章中には，人間の二重性ないし多面性を結論的に含む諸断章が存する。La. 102-Br. 112, La 103-Br. 111, La. 119-Br. 405 が，そうであるが，このうち La. 119 のみを掲げると，次のようである——《反対。思い上がりは，あらゆる惨めさの重みと釣合を保っている。思い上がりは，自分の惨めさを隠すか，あるいはまた，もし自分の惨めさを発見すれば，それを知っているということで得意になるかのどちらかである。》

（二）2°《空しさ》Vanité の章にに，《空しさ》はもちろん《定めなさ》inconstanceや《弱さ》faiblesse,《不安》inquiétude にかんする諸断章がある——La. 54-Br. 113, La. 61-Br. 127, La. 64-Br. 354, La. 65-Br. 436, La. 73-Br. 164。しかし 3°《惨めさ》の章中にも，ほぼ同じ内容を叙したものが存する——La. 102-Br. 112, La. 103-Br. 111, La. 104-Br. 181, La. 121-Br. 110, La. 123-Br. 389, La. 131-Br. 405, etc. 一例を挙げると，2° 章の La. 54-Br. 113 は，次のごとくである——《定めなく奇妙なこと。自分の勤労だけによって暮らすことは，世界最強の国に君臨することとは，正反対なことである。それがトルコ皇帝という人物のなかで結合しているのである。》そうして 3° 章の La. 102 には，次の叙述が見られる——《定めなさ。物事にはいろろの性質があり，魂にはいろいろの性向がある。なぜなら，魂に現われてくるもので単一なものはなく，また魂はどの対象に対しても単一なものとしては現われないからである。そこから，人は同一のことで，泣いたり笑ったりするということが起こるのである。》この両断章を比較するとき，前者が後者の一例であることは，言うまでもないところであろう。それゆえ 3° 章中には 2° 章

の内容が含まれていると，結論して差しつかえあるまい。

（三）8° 章は《気晴らし》Divertissement のタイトルを持っているが，3° 章中にも，《気晴らし》にかんする叙述が見出される。La. 128-Br. 171 は Non classé のものであるが，《惨めさ》という小見出しを持つことにより，同断章が 3° 章にぞくすることは明らかである。ところでこの断章は，次のことを述べている——《惨めさ。われわれの惨めなことを慰めてくれるただ一つのものは，気を紛らすこと le divertissement である。しかしこれこそ，われわれの惨めさの最大なものである。》かように 3° 章中には，8° 章の主旨とするものが含まれているのである。

（四）以上（一），（二），（三）により，われわれは 2°, 4°, 8° の三章における内容的に重要性を持つものが，3°《惨めさ》の章中に綜合的に含まれていることを，知りえたのである。扨てこの 3° の綜合性は，叙述形式の上で，直ちにリヤスの順序における後来性の根拠にはならないが，3° が 2°, 4°, 8° に先行すると仮定すると，論述の主旨が前以って読者に印象づけられ，以後の叙述は読者にとって興味の減殺を多かれ少かれ免かれ難い。したがって《説得術》l'art de persuader を書き，《われわれの気に入ったもの》ce qui nous plaît[1] を志向し，《われわれの心地良さ》nos plaisirs[2] を念頭に置いていたパスカルが，かかる読者の興味を削ぐ叙述方法を採用しなかったであろうことは，確かである。それゆえ前四章の配列順は，(2°・4°・8°)——→3° と推定しうる。

III　2°・4°・8° について

I においては，(2°・4°・8°) と 3° との前後関係は明瞭になったが，カッコ中の 2°・4°・8° の順序は未だ不明であるから，これを決定しなければならない。

（一）Non classé の La. 40-Br. 744 には《人間的学問と哲学との愚かさについての手紙。この手紙を「気ばらし」の前に。》という叙述がある。次に 2°《空しさ》の章にぞくする断章 La. 60-Br. 67 は，《学問のむなしさ》Vanité des sciences なる見出しを持っているが，La. 40 の《人間的学問と哲学との愚かさ》la folie de la science humaine et de la philosophie とは，畢竟《学

問のむなしさ》を示す以外のなにものでもない。したがって La. 40 は 2°《空しさ》Vanité の章に属するものと，言いうる。ところで La. 40（前掲引用文）には，《この手紙を「気ばらし」le divertissement の前に。》とあるから，2°《空しさ》——→8°《気晴らし》でなければならない。

（二）2°《空しさ》中の La. 82-Br. 83 は，次の叙述をもって始まっている——《欺瞞的諸勢力の章をここから始めなければならない。》Il faut commencer par là le chapitre des puissances trompeuses.〔実際には，このタイトルは，fr. 全体の左側の欄外に記されている〕したがってわれわれは，《アポロジー》を構成する諸章には《欺瞞的諸勢力》という《章》chapitre が予定されていたことが，分るのである。この断章は 2°《空しさ》のリヤス中の中間に存するから，この fr. の内容が一章として独立するときは，その内容が 2° の後半を占める関係上，この章がリヤスとなった暁には，物理的に 2° に直接連続することにならざるをえない。したがって，2°——→《欺瞞的諸勢力》の章となる。

（三）ところで 2° 中の La. 40 は 8°《気晴らし》の前に置かれるべきものであるから，必然的に La. 40 は《欺瞞的諸勢力》の最終部分を構成することになる。それゆえ（二）により，2°《空しさ》——→《欺瞞的諸勢力》（La. 40 をふくむ）——→8°《気晴らし》。

ここで La. 40 の《人間的学問と哲学的愚かさ》と《欺瞞的諸勢力》との関係を，検討して置こう。《欺瞞的諸勢力》に属するものとしては，《想像力》imagination（La. 81-Br. 82）の外に，これによって左右され勝ちな《感覚》sens や《愛情》affection,《憎悪》haine（以上は La. 81 に見られる）等がある。ところでこれら欺瞞的なる諸勢力は，《人間的学問》や《哲学》に対しても，大きな支配力を発揮して止まない。なぜなら，《人間は，恩恵なしには消しがたい，生来の誤謬に満ちた存在でしかない。何ものも彼に真理を示さない。すべてが彼を欺く。真理の二つの原理である理性と感覚とは，それぞれが誠実性を欠く上に，相互に欺き合っている。》（La. 82）からである。したがって人間的学問や哲学が，欺瞞的諸勢力の結果物を含まないという保証はないのであり，これらは手頼りにならない《空しい》ものだという結論に達するのである（パスカルの見地からみて）。かようにして，《欺瞞的諸勢力》と《人間的学問

と哲学との愚かさ》（La. 40）と《空しさ》の章（2°）の三者は，相互に内面的に連関しているのである。

（四）4° の章名は，《退屈と人間の本質》Ennui et qualités essentielles de l'homme である。このことは，《アポロジー》の叙述進行の手順から言って，この章から愈々《人間の本質》qualités essentielles de l'homme を取り上げることを，意味している。ところで La. 309-Br. 430 には，《人間のなかには何らかの偉大さの大きな原理が存在し，また惨めさの大きな原理が存在する》という叙途が存する。《qualités essentielles》と《大きな原理》grand principe との関係は，必ずしも明瞭ではないが，両者はほぼ同じ事柄ないしは密接な関係にあるものと考えられるから，《人間の本質》とは《惨めさ》および《偉大さ》を予想するものと，言いうる。そして La. 309 の叙述に照応する事実として，3°《惨めさ》Misère と 4°《偉大さ》Grandeur の両章が，存する。したがって 4°《退屈と人間の本質》の章は，3° と 6° を予想するものであることが，了解される——すなわち，4°⟶(3°・6°)。さて II により，(2°・4°・8°)⟶3°。したがって，(2°・8°)⟶4°⟶(3°・6°) となる。ところで III の（三）により，2°⟶《欺瞞的諸勢力》⟶8° であるから，全部を綜合すると，2°⟶《欺瞞的諸勢力》⟶8°⟶4°⟶(3°・6°) となる。

IV　3°・6°・7°・5° について

（一）3° と 6° について。（イ）——II の（三）により（2°・4°・8°)⟶3° であり，これら諸章は 3°《惨めさ》を帰結とする一セットを構成している。それゆえ，6°《偉大さ》の章がこれらの間に介入する余地はない。したがって，6° はこのセットの前後に置かれたものと，推定しうる。後に置かれた場合すなわち 3°⟶6° の場合は，惨めさから偉大さへの劇的転換が見られ，諸者の眼に強い印象を与えずにはおかない。そうしてこの矛盾対立は，7° の《対立》Contrariétés の章と 3°, 6° 両章との直結を構成しうる点で，効果的である。すなわち，3°《惨めさ》⟶6°《偉大さ》⟶7°《対立》と連続し，この連続性は読者に対してダイナミックな進展を印象づけ，論理的にも説得力を有する。これに反し，6° が（2°・8°・4°・3°）のセットの前，すなわち 1°《順序》と 2°《空

しさ》の間に置かれるならば，人間の《惨めさ》と《偉大さ》とは論理上対立することになるが，2°・8°・4° の三章を介在せしめているので，変化は漸進的となり，3°——→6° のごとき劇的変化の印象は，多少とも稀薄とならざるをえない。したがって当然 3°——→6° であったと，推定される。

（ロ）6°《偉大さ》の章にぞくする La. 220-Br. 328 には，《これらすべての惨めさそのものが，人間の偉大さを証明する。》という叙述が見られるが，この文章は《これらすべての惨めさ》toutes ces misères-là を，既に前提している。したがって，3°——→6°。

（二）5°・6°・7° について。（イ）——11°《A.P.R.》の La. 309-Br. 430 には，《驚くべき対立》étonnantes contrariétés と，これを構成する人間に内在的な二つの《原理》principes すなわち《惨めさ》misère と《偉大さ》grandeur とが，述べられている。そしてこの対立を説明するものこそ，真の宗教たるキリスト教であるとするのが，La. 309 を含む 11° 章の主旨の一つである——《すなわち，真の宗教は，われわれに，これらの驚くべき対立を説明してくれなければならないのである。》(La. 309) それゆえ 11° 章は，《対立》contrariétés と，これを《説明してくれる》nous rendre raison もの，すなわち対立現象の《理由》raison とを，前提としている。そしてこれに対応する事実として，われわれは 7°《対立》の章および 5°《現象の理由》Raison des effets の章の二つを見出すのである。それゆえ（7°・5°）——→11° が，推定される。

（ロ）——a.《惨めさ》と《偉大さ》の並列は《対立》を人に意識させ，必然的に対立という《現象の理由》を，読者の意識に喚び起こす。したがって《アポロジー》の叙述の順序は，3°《惨めさ》——→6°《偉大さ》——→7°《対立》——→5°《現象の理由》とならざるをえない[3]。——b. これはまた次の事からも，推測される。11° の La. 309 は，人間の惨めさと偉大さの対立の理由を提示説明しうるものはキリスト教のみであることを，言わんとしているのであるから，この基本的な対立の宗教的説明は，11° 章以降において為されるものと期待される。したがって 5°《現象の理由》の章は，この本格的説明の予備的意義を持つことが，推測される。実際，人間の《惨めさ》と《偉大さ》の矛盾の理由について直接触れている断章は，同章（5°）には皆無である。しかし同

じ現象の理由を理解する場合，人々の内面的深さによって，理解の仕方が異ることを，パスカルは同章中に述べている——《……このように，人が光を持つにつれて，その意見は，正から反へと相ついでいく。》(5° の La. 180-Br. 337) この引用文の内容に照応する，かつ《偉大さ》と《惨めさ》に対する理解のしかたが人の立場によって異る旨を述べた断章に，次のものがある——《惨めさは偉大さから結論され，偉大さは惨めさから結論されるので，ある人たちは，偉大さを証拠として用いたために，それだけ多くの惨めさを結論し，他の人たちは，惨めさそのものから結論したので，それだけいっそう強力に偉大さを結論したのである。一方の人たちが偉大さを示すために言いえたすべてのことは，他方の人たちが惨めさを結論する論拠に役立つばかりであった。……そして，他の人たちの場合は，その逆である。彼らは，果てしのない輪を描いて，互いに立ち向っていった。たしかに人間は，光を多く持つにつれて，人間のうちに，偉大さも惨めさも見いだすものである。》(7° の《対立》中の La. 237-Br. 416) この二個の引用断章のうち，前者 (La. 180) は 5°《現象の理由》に，後者 (La. 237) は 7°《対立》に所属している。この両断章の照応する事実と，11°《A. P.R.》の主旨——人間の惨めさと偉大さとの矛盾の理由は，キリスト教によってのみ説明可能であるということ（前出），ならびにこの本格的説明が《第2部》[4] において行われている事実の三者を綜合するとき，5°《現象の理由》の章は 11° および《第2部》を予想する準備的段階の意義を持ったものという確信に，われわれは到達するのである。すなわち，5° と 11°，《第2部》の三者は段階的直結的連続性を持つと，言いうる。それゆえ 5°⟶11° が推測される。他方 La. 234-Br. 423 には，7° が 3°, 6° の後に来るべきパスカルの指示があるから，6°⟶7° でなければならない（註3参照）。以上 5°⟶11° と，6°⟶7° および (7°・5°)⟶11°（(二) のイ）更に 3°⟶6°⟶7°⟶5°（(二)のロ）の四者を綜合すると，3°⟶6°⟶7°⟶5°⟶11° を得る。

したがって今回の結論をすべて総括すると，次のごとになる——《第1部の序言》(La. 48-Br. 62)⟶1°《順序》⟶2°《空しさ》⟶《欺瞞的諸勢力》(La. 40-Br. 74 を含む) ⟶8°《気晴らし》⟶4°《退屈と人間の本質》⟶3°《惨めさ》⟶6°《偉大さ》⟶7°《対立》⟶5°《現象の理由》⟶11°《A.

P. R.≫。

＜註＞

（1） Pascal, Œuvres complètes, Présentation et notes de L. Lafuma, Éditions du Seuil, Paris, 1963, p. 355.

（2） ibid. なお拙論「パスカルの説得術と思考法について」（駒沢大学外国語部研究紀要，1号，1972）参照。

（3） 7°≪対立≫の章が3°≪惨めさ≫および6°≪偉大さ≫の両章の後に来ることは，次のパスカルの前書きで明らかである——≪対立。人間の卑しさと偉大さを示したのち≫（強調点は論者）Contrariétés. Après avoir montré la bassesse et la grandeur dl l'homme. (La. 234-Br. 423)——人間の≪卑しさ≫と≪惨め≫さとが，実質上大差あるものでないことは，ここに多言を要しまい。

（4） ≪第2部≫を構成する各章については，IX回のIII，X回のVにおいて，既に論証が行われている。（註了）

＜附記＞—— 8° 章と 4° 章との順序関係について，附言しておく。もし 4° ⟶ 8° ならば，2°≪空しさ≫は 4° の前に来ることになり，8° の前に来ないことになる。しかし，これは 2° 章に附属すべき La. 4° の≪……この手紙を「気ばらし」の前に。≫というパスカルの記述に反する。